

交錯と継承——建築と写真との関わり——

森仁史

いまでは建築雑誌のグラビアページ抜きに建築を語ることは想像しにくいだろう。しかし、それは撮影機材、印刷技術の発達とあいまって、建築の空間や建物の質感がかもす魅力を意識するようになってからのことであり、それまではおよそ平板な竣工写真しかなかったのだから。ここでは、その創生に関わった時代の成り立ちと写真家の活動を素描してその日本的相貌と意義を考えておきたい。

* * *

日本における写真の歴史をひととげば、その専門教育は1915(大正4)年に創設された東京美術学校(現・東京藝術大学)臨時写真科にいざつく。しかし、これは写真業界の熱意と財政的支援の賜物であって、美術学校は写真を表現の手段と認識していたわけではなかったため、同科は10年後には、東京高等工芸学校印刷工芸科に設備、教官ごと移設され、同科写真部として再出発(1926年)することになった(fig.1)。写真はこの時点では印刷などの複製技術としても地歩を固め始めていた。このため、デザイン教育の分野では技術革新の著しい印刷技術、技法をどう利用するのがきわめて重要な課題だったのである。その始まりは1901(明治34)年に東京高等工業学校(現・東京工業大学)工業図案科に設置された製版工場だった。東京美術学校でも前記臨時写真科設置の1年前にまず製版科が設けられ、臨時写真科の教員はこの製版科教員が横滑りしているのである。中等教育機関では、1919(大正7)年には東京府立工芸学校に印刷科が創設され、この一期生の原弘がその後長く同校の教壇に立った。その他各地の工業学校の図案科が同様の役割を担った。

この頃は写真製版は紙への印刷だけでなく、陶磁器などの工

芸品への転写技術としての役割も担っていた。従って、東京高等工芸学校における写真部の位置はたぶんに製版技術としての写真の応用に傾いていたことは確かだった。つまり、表現者としての写真家ではなく製版技術者を養成しようとしていたのである。当時の教授陣の顔ぶれを見てもそれはよく分かる。このなかで撮影実技を担当したのは岡と畑であった。

教授 鎌田彌壽治*

(1919-20年 欧米留学、光化学・写真製版)

教授 結城林蔵*

(1902-05年 ドイツ・オーストリア留学、グラビア製版の専門家)

助教授 伊東亮次*

(1920-22年 欧米留学、HBオフセットの技術紹介)

助教授 長口宮吉(写真化学、とくにカラー印画の開発)

助教授 岡利亮(実修)

助教授 畑保之(実修)

*は東京美術学校より転任

しかし、写真部が創設された1920年代後半から1930年代は写真がそれまで絵画の後を追っていたピクトリアリズムから写真映像独自の表現へと急速に脱皮しようとしていた時代でもあった。その先端にあったのがドイツに勃興したノイエザハリカイト、いわゆる新即物主義だった。

学校のカリキュラムが必ずしも写真を表現として追求していないとしても、若い学生たちが新進の写真家たちの動向に無関心でいられるはずがない。あるいは、写真に限らずそれぞれの学科の学生たちが新たな表現を繰り広げていた芸術運動に影響されなが

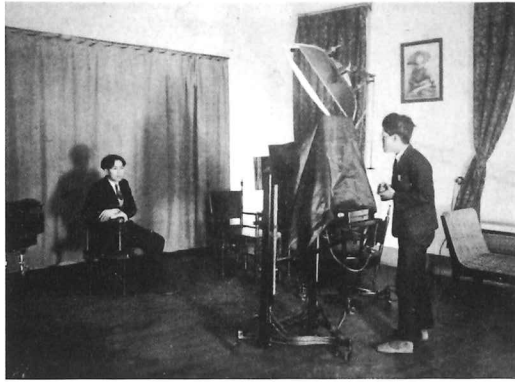


fig.1:東京高等工芸学校写真部写場(1933年 撮影をしているのは影山光洋)

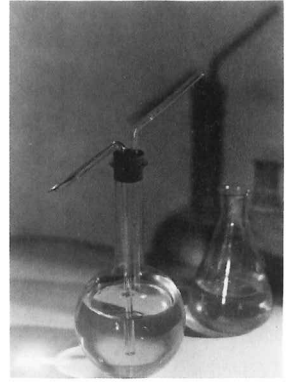


fig.2:池田三四郎(静物)1932年頃

ら、それぞれのジャンルにおいて自らの感覚と生活に即した表現に手を染めることはむしろ自然なことだったろう。世紀末芸術の影響を脱して、デザインが課題と意識し始めたのは新しい都市文化や世界と共有できる感覚の体現だった。様式建築の大理石、花崗岩や木彫装飾からコンクリートや無地の壁紙という素材の顕われへと移っていたのだ。これはインターナショナルスタイルの登場であり、トロッケンバウ(乾燥工法)であり、無装飾な量産であった。これらすべてが写真表現における新即物主義と呼応する関係にあった。なぜなら、ありのままの率直な描写と構成的な画面を旨とする新即物主義の特質は素材の質感を忠実に再現し、無機質であっても空間の美を再現することを求める建築写真ときわめて親近性のあるスタイルだったからだ。

* * *

1920年代は日本の社会にとっても大きな転換期であった。本格的な工業化は都市への人口集中を促し、郊外には勤労者の新しい住宅が建ち始め、東京、大阪をはじめ都市文化が花開き始めた。それは一方で生活スタイルの革新を必然とし、生活改善の掛け声のもと国民的レベルでさまざまな変化がもたらされた。椅子式生活、家族本位の暮らし、子ども文化の確立等々、ハレの舞台だけの欧化からケの生活にまで近世的な秩序と意識とに変革が及ぼうとしていた。それは具体的には住宅の形式や間取り、家具、食生活や行楽に如実に表れてきた。他方で、マスメディアが成立し、華やかな消費文化を伝える媒体(新聞、雑誌、放送、映画、舞台)が国民の生活に浸透していく。本展の基軸となっている朝香宮自身とその邸宅にとって、もっとも重要な影響を与えたパリの現代装飾美

術・産業美術国際博覧会(1925年)はそうした日本での動向を加速させる役割を果たした。

* * *

東京高等工芸学校写真部からは新聞社カメラマンを多く輩出している。朝日新聞(影山光洋、大東元、大木洋一、吉岡専治ら)、時事新報(松島進)、東京日日新聞(渡辺徹男)、サンニュース(江越寿雄)が挙げられる。このなかで池田三四郎(1909-1999)は異色のカメラマンだった。同校講師だった蔵田周忠の勧めに従い建築写真家を志望して入学(1929年)した。後に同じく建築写真に生きる平山忠治も写真部同期だった。蔵田は分離派建築会で建築家としてデビューし、この頃にはインターナショナルスタイルへと活動を転回し始めていた。また、彼は建築と合わせて日本で最初の機能主義デザインを実践するための同人組織、型而工房を東京高等工芸学校の教え子たちを率いて主宰し、じっさいに家具制作にのりだしていた。この研究講演会のための実験映画を池田は川喜田煉七郎と共同製作している。写真表現としては、池田もやはり在学中には即物的な感覚を狙った作品を残している(fig.2)。

『新建築』(1925年創刊)、『国際建築』(1928年改題)、『住宅と庭園』(1934年創刊)など新興の雑誌が池田の卒業(1932年)後の活動の舞台となった。このほか、古くからの雑誌では『建築世界』(1907年創刊)、『建築画報』(1911年創刊)などが写真口絵をうりものにしていた。池田の活躍した雑誌ではとくに革新的な住宅設計が取り上げられる機会が多く、生活空間の再現と新感覚の表現が写真に求められることになった。それはカメラマンの主観というより、つくられた空間の客観的な再現ということだったろう。この

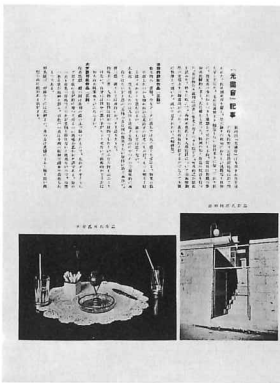


fig.3:建築(土浦亀城邸)



fig.4:臼井正夫(フォトグラム)

スタンスは池田が建築以外に発電所などの土木施設の撮影にも力量を発揮した理由のように思われる。また、『光画』(第2巻第10号)には土浦邸を撮影した作品(fig.3)が掲載され、その後も変わらぬ意欲をうかがい知ることができる。しかし、こうした建築、土木現場は戦況の悪化とともに1943(昭和18)年以降は激減し、やがて池田は建築写真から離れざるをえなくなる。

池田の3年後輩に臼井正夫(1914-2002)がいた。臼井の世代でも新即物主義から学生たちはまだまだ影響を受けていた。在学中の彼らの作品(fig.4)にはそれが直截に表わされている。臼井は卒業後すぐに商工省工芸指導所に勤務した。同所は木工、金工、漆工を中心にデザイン研究、開発を目的として設置された機関であり、記録として、また複写の手段として写真は同研究所にとって重要な手段であった。戦前の日本の産業界ではインダストリアルデザインは殆ど成り立っていなかったで、工業製品を撮影する写真家は稀であったが、臼井の指導所における試作品の撮影は日本で唯一この分野を専門に手がけたものになる。デザイン製品の撮影には忠実な記録であること以上に、素材や仕上げの再現や狂いのない立体感を忠実に表現することが求められる。それはデザインの意図やデザイン製品としての魅力の表現でなければならないんで宣伝写真やいわゆる新興写真とも異なる表現であった。

* * *

臼井が職務として撮影し続けた写真のうち戦後に撮影されたフィルム約2万コマが彼の撮影ノートとともに(財)工芸財団に保存されている。このなかに1948年8月20日に撮影された朝香宮邸の14カットがある。まだ戦後間もないこの時期になぜ工芸指導所

が朝香宮邸を撮影したのだろうか。

商工省は戦時下で物資統制と同時に国策として伝統技法の保存を行っていた。このため国策会社日本美術及工芸株式会社が製品を買い入れ、これを日本美術及工芸統制協会(美統)が引き継いでいた。戦後いち早くこれらをGHQ経済科学局の関係者に見せ、それらを賠償金補てんに充てようとした。つまり、工業施設は爆撃によって失われていたが、地方の伝統技法産地はそれなりに保存されていたので、これを対米輸出品として育成すれば輸出拡大にとつきわめて有効で即効性のある対策になると考えたのだ。そのためには伝統的工芸品の海外での市場性を検討することはどうしても必要であった。1950年の朝鮮戦争勃発後、経済復興に展望が切り開かれると、工芸指導所は海外からデザイナーの招聘を積極的に推進することになるが、この時期にはまだそれは手探りの状態であり、占領軍の設置したCIE図書室で閲覧できた海外雑誌や国内で入手できる情報が貴重だったと思われる。ほぼ同じ時期に、臼井は海外企業の日本事務所(ノースウエスト航空、ナショナル・シティ・バンク)や米軍施設(ワシントンハイツ)などを撮影しており、輸出品のデザイン指導に必要な材料を集めるように命ぜられていたものと考えられる。

朝香宮邸は1947年10月の皇籍離脱後も宮家が所有していたが、同年2月から吉田茂が外相(45年9月就任)公邸として使用していた。5月には吉田が辞職し、47年6月片山哲、48年9月芦田均内閣と続いたが、この期間中朝香宮邸は公邸としては使用されなかった。48年10月には第二次吉田内閣が成立し、再び公邸として使用された。従って、臼井の撮影はこの吉田不在の間隙をぬって行われたことになり、工芸指導所がこの邸宅のデザインのレベル

を把握したうえで、支障のない機会を捉えたのだと推測できる。その後1950年に西武資本に買収されたが邸宅は取り壊しを免れ、1981年12月東京都が購入し、現在の庭園美術館として整備公開されるという運命をたどった。

臼井の写真(cat.no.0 | 2)は戦後間もない朝香宮邸の姿をとらえていて貴重なのだが、先に述べたような目的に沿った撮影なので建物への関心は薄く、すべてがインテリアや家具の撮影にあてられている。創建当初と比較するといくつか家具が異なっているのが分かるが、これらの家具もすでに失われているので明確にいつ補われたものかを確定するのは難しい。しかし、一度公邸として使用された後であるものの、基本的に内装には変化がなく、吉田が朝香宮邸のデザインを尊重しようとしていたことが伺える。このように歴史的建築が今日まで伝存するには幾つもの幸運とそれとを遇する人間の意志が働くことがなくてはありえない。そのゆえに、今日我々がこれらの歴史的遺産に対して厳粛な責任を負っていることをもういちど確認しなければならないし、先人たちの写真による記録がそのためにどんなにか貴重な手段となっているか、本展がその営為に対し敬意を表する機会となってくれていることを強調しておきたい。

(松戸市教育委員会学芸員)

参考文献

- ・池田三四郎『松本民芸家具への道』沖積舎 1989年
- ・拙稿『工芸財団フォトアーカイブ』工芸財団 2005年
- ・森仁史編『視覚の昭和—東京高等工芸学校の歩み(2)』松戸市教育委員会 1998年
- ・猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館 1986年

写真撮影:

小野智光/ONO Tomomitsu (cat. no. 0|1, 2|6~2|9, 3|5, 4|2~4|15, 4|17~4|20, 5|2~5|13, 6|1)
四方邦熙/SHIKATA Kunihiko (cat. no. 3|2, 3|3)

建築の記憶

—写真と建築の近現代—

[展覧会]

企画:

(財)東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
岡塚章子

[カタログ]

編集:

岡塚章子(東京都庭園美術館)
八巻香澄(東京都庭園美術館)

執筆:

青木 淳
浅羽英男
池上重康
石元泰博
梅宮弘光
岡塚章子
中村一紀
八巻香澄
山口俊浩
村井 修

翻訳:

ルース・S・マクレリー
有限会社フォンテーヌ

デザイン・制作:

美術出版デザインセンター
垣本正哉
笠毛和人
野坂牧子

発行:

(財)東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
©2008

Remembrance of Places Past

Japanese Architectural Photography from
the 19th to the 21st century

[Exhibition]

Curated by:

OKATSUKA Akiko, Curator
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture,
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

[Catalogue]

Edited by:

OKATSUKA Akiko (Tokyo Metropolitan Teien Art Museum)
YAMAKI Kasumi (Tokyo Metropolitan Teien Art Museum)

Texts by:

AOKI Jun
ASABA Hideo
IKEGAMI Shigeyasu
ISHIMOTO Yasuhiro
UMEMIYA Hiromitsu
OKATSUKA Akiko
NAKAMURA Kazunori
YAMAKI Kasumi
YAMAGUCHI Toshihiro
MURAI Osamu

Translated by:

Ruth S. McCREERY
Fontaine Limited

Designed and produced by:

Bijutsu Shuppan Design Center
KAKIMOTO Masaya
KASAMO Kazuto
NOSAKA Makiko

Published by:

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture,
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum
©2008